



服部氏

服部

現在のマルハニチロの前身の

「日本エコレザー」の認定を受けていますが、これをどのように活用されているのか、また、今後どのような方向に進めて行きたいかなどについてお話しいただけます。まず、最初にニチロ毛皮の社名の由来から教えてください。



シープスキンブーツ「ロティニ」

服部 いま販売しているムートンは、百貨店ではインテリア・コーナーに、9月から並べられる製品です。この国

吉村 どのような売場で展開しているのですか？

その後、ヒツジ毛皮の加工技術をアメリカから導入し、ムートンと名付けて事業化しました。今では業務の70%が羊で、その他の毛皮が30%になっています。ムートンは、1968年に買収した長野・上田市にある工場(鞆(なめ)し、染色、縫製しています。

自社国産のムートンで安全・安心をアピール

日魯漁業がミンクの飼育を手掛けることになり、その飼育部署が、北方で取れたオットセイ、アザラシの加工をしていた会社と一緒に、新日本海獣を設立したのが会社の始まりです。1959年ですが、最初はミンク

エコレザー座談会

服部 宏久氏

(ニチロ毛皮(株)社長)

吉村 圭司氏

(NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

稲次 俊敬氏

(NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

日本エコレザー認定のムートンで、本物の毛皮の良さを周知したい

日本エコレザーの6つの条件

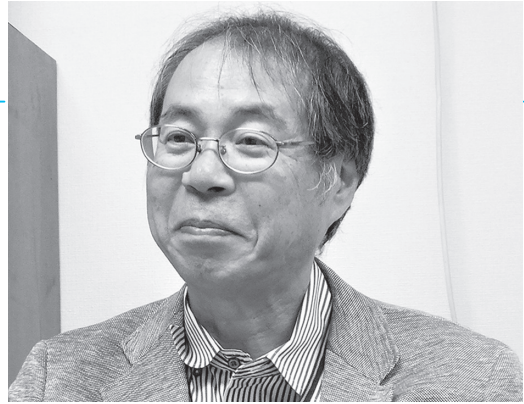


- 1 天然皮革である
- 2 発がん性染料を使用していない
- 3 有害化学物質の検査をしている
(ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料)
- 4 臭気が基準値以下
- 5 適切に管理された工場で作られた革
(排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造)
- 6 染色摩擦堅ろう度が基準値以上

※染色堅ろう度とは、染色された色が摩擦や使用条件にどれだけ耐えるかの指標



吉村氏



稲次氏

産品については「日本エコレザー」の認定を受けています。当初は色ごとに認定を受けなければならなかったために分析費用も掛かったため、基本色に限定して認定を受けていました。これも昨年からの原色についての取扱規定が変わり、すべての色について認定を網羅するようにしています。さらに認定を受けたムートンの加工品も「日本エコレザー」登録ができるということ、加工品も認定登録をしています。

吉村 売場に並ぶ国産品には、すべて「日本エコレザー」のタグがついているわけですが、売場の販売員や消費者の認知度はいかがでしょうか？

服部 タグを付けた当初は、当社の営業マンに「日本エコレザー」についての教育をし、資料も配布しました。同時に売場のスタッフにも一生懸命に説明もしました。しかし、売場によっては、解説パンフレットは置けないところも多く、タグが付いているだけでは消費者も、このタグマークが何を表しているのかわからないという状況でした。

この状況は今も同じで、まだまだ認知度が低く、販売員も商品説明を

優先し、エコレザーのタグについての説明は後回しになり、あまり力を入れられないのが実情です。ただ、ヒツジの毛皮はウールでもあり、製品にはウールマークも付けています。こちらは消費者にも認知度が高く、説明なしでも皆さんご存知です。

稲次 あるアパレルメーカーでは、「日本エコレザー」認定の革を使ってレザーウエアを作った際に、日本皮革技術協会が制作した「エコレザー」とはのパンフレットを胸ポケットに入れて販



ニチロ毛皮の本社で行われた座談会

売しましたが、これが大変好評でした。身体に直接つけるものであれば、安心・安全を謳うマークは訴求力があると思います。当協会のパンフレットをぜひとも活用してください。

食肉の副産物を有効利用した本来のエコロジーファー

吉村 靴業界では、逆にムートンの知名度が高く、秋冬では2000円台のフエイクファアのブーツまで「ムートン」と呼んでいるようです。ニチロ毛皮さんは本物のムートンを使っているわけですから、その違いがわかるよう、もっと宣伝してもいいかと思えますが。

服部 毛皮は家庭用品品質表示法の対象商品に入っていません。ところが、現実には百貨店などで販売するときには、他の商品と同じように品質表示をしないと指導されます。

日本毛皮協会では会員のために表示の指針を作り、それに則って各社が表示していますが、協会員以外の輸入業者などは独自に品質表示をするところもあります。そこには統一性もなく、消費者にとってもいいことではないでしょう。



稲次氏



吉村氏

日本毛皮協会としては、早く品質表示法の対象商品に入れてもらいたいとお願いしています。その際は、「羊毛皮」ではなく、「ムートン」という表示で載せてもらいたいですね。そうなれば、ポリエステルやアクリル製のものは、「ムートン」と呼べなくなり

ます。
稲次 ムートンという言葉自体は知られているので、ホームページなどを使って、本物のムートンはこういうものだと、知らせたいですね。

服部 そつですね。エコレザーの表示でも、気になっていることがあります。

あるフェイクファーを製造している会社が、「ジャパン・エコファー」という商標登録しているのです。石油原料で作られ、地中に埋めても土には返らないようなフェイクファーをそのように呼び、現場では頭のジャパンを省略して「エコ・ファー」と呼んでいるのです。繊維関連のマスコミもそのように書きます。これでは消費者に誤認されてしまいます。

同様の例として、家具業界やパレル業界では人工皮革を「レザー」と呼んでいるし、ファッション業界では

毛皮つばいものや起毛したものをすべて「ファー」といいますね。とくに若い人達がそつです。

吉村 最近は天然の動物の皮を使った商品より、なぜかフェイクの方が、環境に優しいと言われるています。動物の皮は食肉の副産物であり、廃棄されるものを有効利用した、本来のエコロジーにつながる素材です。しかしながら、ヨーロッパの動物愛護団体などがクレームをつけ、フェイクファーがエコだと思われるような風潮になっています。

毛皮でもヒツジはそれほど言われませんが、同じ食用の副産物として



ひつじき

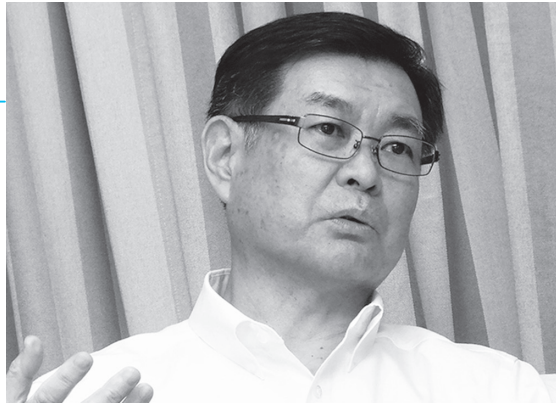
毛皮にされるラビットなど、カワイイというだけで愛護団体が騒いでいるのが現状です。

吸湿性、放湿性のあるムートンを インテリア雑貨で提案

吉村 ムートンでは、先ほど出たムートンブーツへの利用のほかに、どのような製品がありますか。

服部 インテリア商材が多く、ムートンシートが主力商品です。床ずれ予防のためのシートという病院用の需要もありますが、主に高級寝具として売られています。布団やマットレスの上に敷くものですが、ムートンはただ暖かいだけでなく、断熱性・吸湿性・放湿性が優れているので夏でも快適に使えます。

また、湿気を吸収するので就寝時には、冷んやりと感じ、徐々に体温で温め、覚醒時には体温を多少高める作用があるなど、優れた機能を発揮します。ウールと比較しても、吸湿性・放湿作用が優れています。ムートンシートの値段は、一番高いものは100万円もするものもあります。ラビットの一種のレッキスという毛皮のブランドケットでは、200万円もするものも



服部氏

扱っています。

稲次 寝具や靴のような生活関連以外でも、ムートンの需要はありますか？

服部 ムートンの用途は工業用では、高級自動車の仕上げ用バフ材としても使われています。対抗品としてウールボアで作られたバフがあります。ペテランの職人さんに言わせると、ムートンの方が仕上がりがいいし、バフ材が長持ちすると評価してもらっています。また、体育館の床を磨く業者に、ムートンを帯状に加工したものを供給しています。ほかには、野球のグローブメーカーにも供給しています。手首の部分の緩衝材として使われているようです。

われわれの業務には、毛皮のクリニングもあります。溶剤を使って行いますが、ムートンなどを家庭で洗う場合、リンス入りシャンプーを使えば、いつまでもしなやかな状態を保てます。

吉村 ほかにどのような製品を扱っていますか？

服部 シープスキンを使ったブーツや、インテリア雑貨となるスリッパやルームシューズなども手掛けています。新しいものでは、「ひつじき」(羊の中敷きの意)というブランドの中敷があります。価格は2500円で、リペアシヨップや東急ハンズに納めていますが、まだ計画通りの販売量には達していません。

稲次 中敷は1000円シヨップでも売られている一方で、革で成形された1万円を超すようなインソールまであります。ムートンの持つ吸湿性、放湿性、保温性のような機能性を生かした中敷は、夏場の冷房をきつくした環境で働く女性に向けても有効ではないでしょうか？

服部 そうですね。吸湿性がいいことで、食品業界の水場で働く人の長靴に入れてもらったこともあります。夏などは1日中履いていると、コップ1杯以上の汗をかきます。しかし、ムートンの中敷を入れていけば、1日中履いていてもベタつき感はなく、夜中に乾かしておけば、次の日にはサラサラの状態で歩くことができました。現場からは評価されています。